

## 書評

森本 幸一 著

## 『学びの土壌を耕す小学校教育－共振する感性と知－』

Review of “Elementary school education that plows the soil of learning : Resonating sensitivity and intelligence” by Kouichi

Morimoto

矢野 正

Tadashi YANO

## 要旨 (Abstract)

西日本私立小学校連合会学級経営部会において、長年にわたり大変お世話になった森本幸一先生が、この度ご退職されるにあたって、1つの区切りとしてこれまでの教育実践をご高著としてまとめられた。大阪教育大学教育学部の大先輩でもある森本幸一先生には、学級づくりや学校経営をはじめ、学級経営部会以外でも多くのご指導を受ける機会に、これまでに恵まれてきた。

森本先生は、ご勤務の間の多くを児童の指導や教育・研究に没頭され、1988年度には兵庫教育大学大学院教育方法コースにて1年間、杉浦美朗教授より、「豊かな感性を育てるには」というテーマで研究指導を受けられた。また、教科の枠を越えた研究会「新視界クロスオーバー21」や「日韓・アジア教育文化センター」、「学校改造研究会」などの先生方と研究、研修、研鑽を日々重ねられてこられている。

近年は高齢社会の中で、何かと老年期や晩年の生き方が話題とされているが、肩ひじを張らずに社会や家庭の中でできることをしていければと考えておられるご様子である。森本幸一先生の素晴らしい教師としての姿やまなざしを私たちは教育現場へと還元し、引き継いでいかなければならないだろう。それが後世に残された私たちの使命であり、このようにご高著としてまとめられた森本先生への恩返しになるのではないだろうか。

キーワード：小学校教育、学び、感性、知（知性）

Key words : Elementary school education, Learning, Sensitivity, Knowledge, Intelligence

## I. はじめに

本書は、森本幸一氏が小林聖心女子学院小学校（兵庫県）での勤務の中で、45年間にわたって教育実践され、授業研究を独自に進めてこられたものを、特に「感性と知」の関わりについての成果及び論考を、この度、著書としてまとめられたものである。

本書は、授業研究を主体とした4つの章で構成され、(A) 感じ考え、言葉を読み解く読解、(B) 現代の社会的問題を事実をもとに解き明かす探究、(C) 自然や環境からの発信を心身を通して受け、感じ考えたことの表現、(D) 真実を求め、自分の漢字や考え方の道しるべとなる生き方、として、小学校段階の子どもたちの学びの基礎や土台をまと

めたものである。そのような授業は、最先端の21世紀型の教育スタイルであり、子どもの心身を健全に育てると同時に、ともに成長し助け合う仲間、社会を形づくる一翼をも担うものであると考えられる。

## Ⅱ. 本書の内容

本書の内容を、少しレビューしたい。序章でまず、「感性」と「知」の定義がなされている。特に、子ども主体の学びと学び方について書かれている。続く本文は、先述の通り4部構成になっている。第一章「読解：言葉を読み解く」、第二章「探究：問題を解き明かす」、第三章「表現：心と体から感じ、考えたことを表す」、第四章「生き方：生きる道しるべを探る」で、小学校教育の全体を網羅しようと試みている。第一から第三章までは観点別に、第四章はそれ以外の実践がそれぞれ記載されている。

森本幸一氏は、まず「A 読解」において、「言葉を読み解く」と副題をたて、第2回韓日教育国際会議における小学校での母（国）語教育を考える中で、日本の諺（ことわざ）である「木を見て森を見ず」を例に、筋道を立てて考えていくことの大切さを丁寧に説いている。また、第3回韓日教育国際会議では、6年国語「天下一の鎌」の授業実践を用い、日韓の指導及び児童生徒の反応についての比較及び貴重な調査を行っている。この物語は、現在文部科学省検定の教科書には掲載されていないが、これからの人生を真剣に考え、立ち向かっていくうえで大変意味のある教材であり、自分なりの「生き方」を考えさせることができるとし、森本先生の開発された授業案等も掲載されている。さらに、6年国語「あんず林のどろぼう」の感想文から、イメージと理論の共振としての「言語」について改めて追究している。子どもの気づきや感じ方、思い、考えを大切にしていきながら、少しずつそれらの必要性に気づかせていきたいとの思いからであろう。

次に、「B 探究」において、「問題を解き明かす」と副題をたて、総合的学習に求められているものについて、3つの単元についてそれぞれ紹介している。その総合的学習とは、学びそのものの総合化であり、真に学び手の内なる総合化なのではないかとの仮説に基づいている。この内なる総合化が図られてこそ、学びと同時に心の豊かさも育ち、確かに豊かな人間形成へとつながるものであると考えられている。そこからは、現代の様々な心（精神）の病氣も解消されていくに違いないだろうと森本先生の思いが綴られている。ここに掲載されている3つの単元は、1996年に扱った3年「わたしたちのくらしと商店」の総合学習、1999年に取り上げた4年「水の旅」の授業実践、2004年の5年「かわり合う生命」の単元事例である。それぞれに、劇・ディベートなどの様々な教育的手法・方法を先駆的に用いながら、授業計画及び指導計画と学習の展開、そして事後の反省とまとめ、総括が丁寧かつ詳細に記述されている。

「C 表現」では、「心と体から感じ、考えたことを表す」と副題をたて、1988年度に内地留学で研究生として学ばれ、師と仰ぐ杉浦美朗兵庫教育大学大学院教授からのご指導を受けた理論的内容が、その論の中心となっている。自明なものとして考えられている「感性」が、いかに曖昧なものであって、その感性が「共通感覚」を仲立ちとして、いかに「知性」と密接に結びついているかを理論的に考究している。6年「自然の中で1・2」の授業を通してでは、自然の中に包み込まれていると感じられるような場所（トポス）において授業をすることは、子どもたち一人ひとりの心の中に、その自然（宇宙）とともに生きる自分（小宇宙）を知らず知らずのうちに感じさせ、生きる喜びと同時に生きる力をも湧かさせてくれるのではないかと述べられている。また、「メルヘンを体や音で表現する」では、新しく入学してくる子どもたちに何を身に付けさせたいかを第一に考え、子どもたちの柔軟な感覚を鈍らせたり、偏らせてしまうのではなく、友達とともに、体を自由に動かしたり、操作したり、観察したり、絵や音楽に表したりして豊かな感性を育てていきながら、知識や技術を習得させていくことが重要であるとし、総合的な学習の成立過程を詳細に記

載されている。最後に、「表現活動を通しての豊かな人間性の育成」については、5・6年における創作ダンスの実践を通して、創作ダンスによって育つものを、豊かな感性、集中力、意志力、行動力、協力することの喜びへと昇華させており、オイリュトミーの教育的意味との異同から比較・考察し、子どもたちに責任感や自負を育てることにつながるのではないかと主張している。

「D生き方」では、「生きる道しるべを探る」と副題をたて、子どもたちの道しるべとなるだろういくつかの例を挙げて、その論を展開している。1つ目は、「戦争は人びとの心と生活を破壊する」という6年国語「ロシアパン」(2000年10月)の実践から、2つ目は、「すべての生物が補い合う地球 地球環境」、特に土・干潟・海について、3つ目は「障害・差別・人権」として、松下竜一、キング牧師を題材として、4つ目は「人生の先輩としての役割とは 博愛」について、5つ目は「メルヘンで語られる豊かな生き方 安房直子」からの学びを、それぞれ紹介している。本章のおわりには、私たち大人が子どもたち自らの学びを通して、自ら生きる喜びと力を身に付けていくための道しるべを少しでも伝え、未来を生きる子どもたちの学びの土壌づくりに役立てられれば良いのではないかと締めくくっている。

あとがきでは、「感性は自らの感性(感覚)を確かめながら形づくっていくことが重要であること。そして感性と知性とは対立するものではなく、共通感覚を仲立ちとし、感性を基盤として知性は羽ばたき、知性によって感性は秩序立っていくこと。さらに感性を目覚めさせ、関係づけ、秩序立てていくことが知性を形づくること、知性は感性の覚醒、活性化なくしては知性もやせ細っていく」ことが明示されており、「自然と感性で捉える」とはどういうことかを広く、そして深く探究されている。そうして、この共通感覚を仲立ちとした感性と知(性)の共振による学びは、学ぶことのすべてにおいて程度の差こそあれ大変重要なものであるとし、小学校の授業で常に柔軟かつ実践的に研究をされてこれ、今回ここに教師としての学びの集大成として、本書をまとめられたものである。そこでは、子どもたちの学びというものが、真に子どもたち自身の感性と知、そして身体を子どもたち自身で伸ばしていけるような学びとなり、学ぶ喜びを感じると同時に生きる自信を得るものになることを、森本先生ご自身が心から願っているものを物語っている。

### III. おわりに

以上、本書の内容を紹介してきたが、森本幸一先生のこれまでのご貢献・ご業績は、学級づくりはもとより「感性と知」の共振・共鳴という観点から、教科教育のみならず、総合的な学習など幅広い様々な分野にわたるものと予想・予測される。また、本書を読むとよくわかるが、先生の丁寧なご指導の姿や、子どもたちの作品から、教え子らとの距離感が大変すばらしいものであったことなどがありありと感じ取ることができよう。最初から最後まで首尾一貫して、物腰の柔らかな先生の姿勢や優しいまなざしでの児童への教育・指導などが、ふしぶしに垣間見られる内容となっている。これらは、筆者も世話役を務めた西日本私立小学校連合会学級経営部会をはじめ、新視界クロスオーバー21、日韓・アジア教育文化センターなど、学級づくりの研究・教育者に、今後とも引き継がれていくことが強く期待されるものである。ぜひ、小学校教員をはじめとした皆様には、ご一読願いたい書であると考えている。筆者も「心を耕せ、体を耕せ」のもとクラスづくりを行ったことがあるが、まさに森本先生の目指す教育の方向性に合致するものであると納得しているところである。

また最後に、筆者自身の研究・教育に果たして大きなビジョンがあるのか、研究成果が現実の教育環境に本当に還元されているのか、厳しく内省せざるを得ない。壮大な教育物語である本書に触れるにつれ、目の前に登場した新たな巨匠の背中を、さらに追いかけてみたくなった。

## 【参考資料】

斎藤了一著『天下一の鎌』（ポプラ社文庫）1980年8月発刊

## 【本書の構成】

はじめに

目 次

序 章 私は小宇宙

学びと学び方

A 読解―言葉を読み解く―

- 1 小学校での母（国）語教育を考える  
―言葉の教育の役割―（第二回 韓日教育国際会議にて）
- 2 6年国語「天下一の鎌」の授業実践
- 3 イメージと論理の共振としての言語  
―6年国語「あんず林のどろぼう」の感想文を通して―

B 探究―問題を解き明かす―

総合的学習に求められているもの

- 1 3年「私たちのくらしと商店」―商店は社会の扉を開く―
- 2 4年「水の旅」の授業実践
- 3 5年「かかわり合う生命」―食品添加物から私たちのくらし、生命について考える―

C 表現―心と体から感じ、考えたことを表す―

- 1 6年「自然の中で」の授業を通して  
―共通感覚によって深められる感性と知―  
「自然の中で」の授業 そのⅡ
- 2 「メルヘンを体や音で表現する」―新1年生教育への提言―
- 3 「表現活動を通しての豊かな人間性の育成」―5, 6年創作ダンスの実践を通して―

D 生き方―生きる道しるべを探る―

- 1 戦争は人びとの心と生活を破壊する―6年国語「ロシアパン」から―
- 2 すべての生物が補い合う地球 地球環境―土、干潟、海―
- 3 障害・差別、人権 松下竜一、キング牧師
- 4 人生の先輩としての役割とは 博愛
- 5 メルヘンで語られる豊かな生き方 安房直子

あとがき